

川端望

Q:先日ハノイへ行きました。発展の途中の時期に行き、昔からの良い伝統などと新しいものがミックスしているようでしたが、今の日本のように昔からの良いものがどんどん失われていってしまうような淋しい哀しい状況にはなって欲しくないと思いました。その為に日本がどんな手を差しのべるのがよいのでしょうか?

A:工業化一般もそうですが、とくに外資主導の工業化は、進めれば社会の伝統的なあり方を変えてしまいます。私は人々を貧困から解放し、個人の自由と尊厳を尊重する方向で生活様式が変わることは肯定すべきだと思います。しかし、地域や民族の文化・慣習には、記録したり、継承したりすべきものもあります。

幸い、いまは国際援助の中にも固有の文化の尊重という考え方はあるので、ODAですること、NPOや市民団体が自主的に行うものを含めて、色々な援助と交流の方式があると思います。

日本が経済成長の過程で生活・文化を変革した経験を、日本人自身が知らなくなっていることにも注意しなければならないと思います。体験した人も忘れず、体験していない世代が多数になってきているからです。日本人が自国の経験をよく学びなおして整理し、ベトナムの参考にしてもらうことも有益だと思います。

Q:ベトナムの経済開発は日本をモデルに進められているのでしょうか。

A:日本の経済発展にモデルになるところがあるとすれば、天然資源に依存せず(できず)ものづくりのレベルをグレードアップすることで発展する、ということだと思います。それによって広範な分業が生まれ、広い範囲の人がスキルを持つようになるので、格差がそれほど大きくない経済発展ができる可能性があります(いま日本でもそうした発展方式が崩れて格差の拡大が問題になっているわけですが)。天然資源の輸出に依存すると、どうしても分業が狭くなり、また資源が採掘できる土地を持っているかないかで格差が大きくなりやすいと思います。

もちろん、都市問題や公害、雇用における男女の不平等など、日本の経済発展の中で評価できない側面もありますから、何でもモデルとすべきではないでしょう。ただ、問題点や失敗した部分からも学ぶことはできるでしょう。

Q:ベトナムの人々の対日感情、日本に対する見方はどうなのでしょう。

A:日本のどういう側面を誰がどう見るかに応じて、様々だと思います。

歴史の問題から言えば、アジア・太平洋戦争期に日本がインドシナ半島を軍事支配したことは事実であり、これを批判的に見る人は当然いるでしょう。ベトナムは、はるかにさかのぼれば中国の諸王朝、近現代においてはフランス、日本、アメリカ、その他多くの大

国とたたかい、駆け引きをして独立を保とうとした歴史を持っていますから、その歴史の中に日本も位置づけられていると思います。

一方、現代の工業化と都市生活の中では、日本の大まかなイメージは、ものづくりの大国であり、優れた性能と品質の自動車やオートバイや家電製品をつくりだす国、というものだと思います。それと関連して、日本人は大体において真面目でよく勉強し、よく働くと思われています。

Q：ベトナムは社会主義国なので、日本よりも中国を見習っている部分があるのではないのでしょうか。

A：そのとおりで、市場志向社会主義の考え方は、中国共産党をまねているのだと思います。市場経済だけれども、共産党の一党独裁は維持ということです。

ただ、中国とベトナムはかなり条件が異なります。中国は、多様かつ豊富な天然資源があり、第二次大戦以前を含めて、工業化の長い歴史も持っています。米ソ双方との関係が悪い時代に自力更正政策をとったので、水準には問題はあるものの、ひとつおりの産業技術をフルセットで持ってもいます。そのことが、地場企業の発展の背景になっています。また国内市場もたいへん大きく、外資が中国市場に供給したくて参入してくる状況です。その一方で、民族問題や経済格差の問題は深刻です。

ベトナムは天然資源は特定のものしかなく、地場企業は弱体です。国内市場も、オートバイのような例外を除いて、まだそれほどの規模ではありません。中国よりも、外資系企業に資本や技術を依存する部分が大きくなるし、より輸出志向の工業化の道を進むことになるでしょう。

Q：ものづくりをグレードアップするには教育が大事だと思いますが、ベトナムではその体制はどうなっていますか。

A：具体的な教育制度については、私はあまり知りません。しかし、識字率が高いことがベトナムの有利な条件であることは確かです。子どもも年寄りも新聞を読んでいます。初等教育は充実していると思われます。日系企業の経営者に聞いても、工場の労働者としてはたいへん優秀だという意見が多いです。しかし、同時に、優秀な管理者や技術者が少ないという意見もよく聞きます。高等教育や専門教育は弱いと思われます。だから、多くの人が工場ではたらいで、あるところまで豊かになることはできるでしょうが、そこからグレードアップするところに課題があると思います。

Q：外国資本が導入された場合、国内企業が競争に負けて弱体化するのではないのでしょうか。

A：その可能性はあります。既存の国内企業が競争に負けて弱体化することもあります。むしろ新しい産業で外資が主導権をとって成長し、地場企業の成長が遅れるという形で格差が現れています。例えばオートバイ産業では日系企業のシェアが高い。これは日本から

輸入するのではなく、ベトナムで生産しています。部品の現地調達率は高いのですが、重要な部品は日系部品メーカーのベトナム工場から調達しています。つまり、地場企業の部品メーカーに有力なものが少ないのです。また、ベトナムにも地場のオートバイ企業があるにはありますが、部品ワンセットを中国から輸入して組み立てる方式で、日系企業より部品の現地調達率が低くなっています。品質もよくありません。

ベトナムのおかれた条件では、とりあえず外資企業主導の発展になるのはやむを得ないことと思います。問題は、それを地場企業の発展にどう結びつけるかでしょう。外資企業で働いた人が独立して会社を起こすといった動きが、広がってくるかどうかです。

例えば、オートバイ産業は色々な可能性を持っています。オートバイを使えば必ず修理が必要になるので、補修部品産業はオートバイの新品をつくる産業より早くから形成されています。ここでは、純正部品ほど品質がよくなくても許容されるので、地場企業もあります。そこからグレードアップして日系企業に納入できる部品企業になるといったルートもあるかもしれません。また、オートバイ産業に携わった人が身につけたスキルは、他の機械・金属産業でも有効だと思われます。ですから、オートバイ産業が長い目で見れば機械工業発展全体を促進する可能性があります。

Q：ベトナムは韓国のサムスンのような企業集団を形成できるでしょうか。ベトナムから生まれる多国籍企業はあるでしょうか。

A：いまのところ、地場企業の発展という点ではベトナムは遅れています。著名な多国籍企業はベトナムからはまだ生まれていません。もともと産業基盤が弱かった上に旧計画経済国だったことが発展を遅らせています。韓国、台湾と比べてもそうですが、改革された国有企業が一定の力を持つ中国や、華僑系を含む財閥が工業化の担い手になったアセアン先発諸国と比べても、ベトナムの弱さが目立ちます。いま、株式市場の整備を通して国有企業の改革と株式会社化、私有企業の発展が促進されており、その行方が注目されます。

Q：ベトナムがグローバル経済に組み込まれると、社会主義と市場経済で矛盾が生じるのではないのでしょうか。

A：生じます。市場経済化を進めるためには、財産権を尊重して、政府がこれを守らなければなりません。何が自分のもので何が他人のものであるかがはっきりしていなければ、市場での取引ではなく詐欺や強奪、腐敗、縁故による利得が横行するでしょう。しかし、社会主義体制とは生産手段(機械設備や原材料)を何らかの形で社会化するものですから、生産手段の私有財産化に対して否定的にならざるを得ません。ベトナムで市場経済化を進めていくと、どこがどう社会主義なのかわからなくなるでしょう。

また、一党独裁の計画経済では、共産党の各級指導者が経済管理の重要部分を握っており、それを根拠に権力を維持しています。これが市場経済化していくと、経済が市場によって調整される部分が増えるわけで、共産党の指導者が権力を持つ経済的根拠がなくなっていくます。

ただ、ベトナムは、東欧諸国のようにソ連から社会主義体制をおしつけられたのではなく、共産党が主導して国を解放しました。ですから、歴史的には共産党支配にある程度の正統性がありました。また、いまのところ共産党政権下で経済が成長して、生活が向上しています。だから、いますぐ国民の不満が募って、一党独裁と社会主義の建前が放棄されるということにはならないでしょう。

Q：市場経済化すると、資本という、いわば悪魔のようなものを呼び出す結果にならないでしょうか。資本主義の弊害がベトナムにも生じないでしょうか。

A：生じます。私は、自由放任の資本主義は経済格差や環境破壊をもたらすと思います。資本主義の問題点が放置しがたいからこそ、マルクスは『資本論』を書き、社会主義者たちは市場と資本に依存しない社会をつくろうとしました。ベトナムの革命は民族解放を主眼としたものでしたが、解放勢力は社会主義者が主導したので、結局、計画経済をめざしました。

しかし問題は、社会主義計画経済建設の試みが、いままでのところ一党独裁の不自由な社会と停滞した経済に終わっていることです。だからソ連・東欧は体制転換せざるを得なかったし、ベトナムも経済危機に直面して市場経済化せざるを得なかったのです。集権的計画経済という路線はいまでは現実性がありません。

自然の制約が大きい農業部門とか、需給調整がききにくい部門、コミュニティの社会関係が強力な小さい地域単位などでは、市場以外の方式で資源配分を行った方がうまくいくことはあります。また、資本主義でも、組織の中では計画の原理が用いられているわけです。しかし、一国の経済、しかもグローバル化の圧力の下にあるシステムの基本は何でいくかと問われたときにはどうでしょうか。現時点で途上国が経済開発を試みようとする、あらゆるリスクと弊害にもかかわらず、市場と資本主義に依拠せざるを得ないと思います。

もちろん、資本主義と言っても色々なあり方があります。ベトナムの市場経済化がより進行しても、社会主義の理念や理想に込められていた社会保障や公教育の充実、労働者の経営参加などを、何らかの形で活かすことは可能でしょう。ベトナムの人々がそれを「市場志向社会主義」と呼ぶか、福祉国家とか社会的市場経済と呼ぶかは自由です。しかし、それは、これまで多くの人々が考えてきた、体制としての社会主義とは別物であり、市場経済や資本主義の一つのあり方なのだと思います。基本システムは市場と資本であって、その機能不全な部分を他のシステムで補正・補完するのでしょう。

悪徳をもたらし、いったん呼び出すと制御しにくいと言う意味で、資本は悪魔の側面を持つかもしれません。しかし、それ以外につきあう相手がいなければ、つきあい方を考えるよりないのだと思います。